

バブル崩壊という「トランジット」と若者の意識

～今につながる社会現象から何を学ぶか～

安部博文

基礎教育課程非常勤講師

Transit called the bubble burst and consciousness of the youth.

～ What do you learn from a social phenomenon to be connected in now ? ～

ABE Hirofumi

Division of Liberal Arts and Science

(Received October 31, 2018 : Accepted December 20, 2018)

キーワード：トランジット、バブル崩壊、雇用、仕事、JPOP

はじめに

「バブル崩壊」（以降、崩壊）は、1991年から93年にわたる社会現象であるが、これにより、日本の社会が大きく変容し、「トランジット」の機能を果たしたのではないか。この文章はこのような仮定をテーマとしたものである。

「トランジット」とは、「通行すること・通過すること」などの意味がある。また、航空機で目的地に行く途中、給油などのために一時他国の空港に立ち寄ることを指す場合もある。空の旅における「トランジット」もあれば、時代の流れにおいても、あるいは個人の人生においても、「トランジット」＝「節目」はつきものだろう。「節目」を境にして、その様相が大きく変化することは、決して稀なことではない。その意味において、日本の社会はこの崩壊を境に変容し、未だにその“陰影”の中にあるのではないか、という問題意識がこの論考の出発点である。

この論考の冒頭、「トランジット」の前後で社会がどう変容したのかを探っている。そのテーマとして「3K」を現象として提示している。JPOPという音楽を通した「感性」のK、累進課税という税制からみた「金銭」のK、新卒の採用という就職から考える「雇用」のKが「3K」である。どう変わったのか、現象を見つめることから始めている。

1980年代半ば以降のオタクの登場とバブル期は重なり合う。親の経済力に依存することにより、オタクは存立するが、崩壊後もそのすそ野は広がっている印象がある。オタクを簡略に定義すると、「ゲームやアニメに没頭し、人間関係や社会に対して一定の距離を置く傾向のある人々を指す」。この定義は、崩壊後の若者たちの意識と符合する。それは、偏った者たちのみへの呼称ではなく、今の社会の傾向といえるかもしれない。統計数理研究所の調査によって、その検証を試みている。

仮に、大学にオタクが増えてきた、と措定してみると、「トランジット」を果たすべき大学が、その機能を全うすることが、より難しくなることを意味する。学生という青年期から、社会で働き、そして家庭をもつ、いわゆる成人期へスムーズに移行できない“ポスト青年期”が大きな問題になっている。その移行がスムーズに実行できないことの意味や背景を見つめ直す必要がある。

2018年9月、経団連の中西会長が就活ルールの廃止を表明した。その後、様々な意見が噴出しており、最終結論はみえてこない（2018年10月現在）。

若者（学生）が常に翻弄される弱い立場であることは認識しておきたい。

1. 「トランジット」を3側面から考察する

(1) JPOP にみる「トランジット」の前後

JPOP は社会的な問題をテーマとすることが少ないとされる。しかし、80年代の日本のロックの歌詞には、企業社会でもがき、苦しみ、時にはそれに抵抗する人々の心情を垣間見ることができる。まさに、「大きな物語」⁽¹⁾を背景とした時代、といえるだろう。国家や所属する組織が提示したテーゼに対して、抗い、闘い、自己を主張する。順応よりも、先ず反抗が優先された時代といえる。そのような時代、1980年代に若者の圧倒的支持を得た尾崎豊の歌詞を取りあげてみたい。

① 尾崎豊 「Bow !」

否が応でも社会に飲み込まれてしまうものさ
若さにまかせ 挑んでく ドンキホーテ達は
世の中のモラルをひとつ 飲み込んだだけで
ひとつ崩れ ひとつ崩れ
すべて壊れてしまうものなのさ

あいつは言っていたね サラリーマンにはなりたかねえ
朝夕のラッシュアワー 酒びたりの中年達
ちっぽけな金にしがみつきぶらさがってるだけじゃ
NO NO
救われない これが俺達の明日ならば

午後4時の工場のサイレンが鳴る
心の中の狼が叫ぶよ
鉄を喰え 飢えた狼よ
死んでもブタには食いつくな

夢を語って過ごした夜が明けると
逃げ出せない渦が 日の出と共にやってくる
中卒・高卒・中退 学歴がやけに目につく
愛よりも夢よりも金で買える自由が欲しいのかい

午後4時の工場のサイレンが鳴る
心の中の狼が叫ぶよ
鉄を喰え 飢えた狼よ
死んでもブタには 食いつくな

鉄を喰え 飢えた狼よ
死んでもブタには食いつくな

「Bow!」(1987) は工場労働者による企業社会批判である。また、学歴社会にたいする批判でもある。この歌

詞からは、自らの生き様をその個性によって強烈に体制に叩きつけているような印象を受ける。将来の自身のすがたでもある「中年達」の姿は、「ちっぽけな金にしがみつки」、「愛よりも夢よりも金で買える自由」そのものと綴っており、将来の範とするより、否定すべき存在として扱われている。

また、1980年代は管理教育が教育界を席卷した時代でもあったが、本来、管理者の側であろう教師を批判するのではなく、その立場を慮り、その苦悩の一端に理解すら示したのが、ユニコーンの「PTA ～光のネットワーク～」(1990)である。

② ユニコーン 「PTA ～光のネットワーク～」

先生 先生も僕達と一緒に踊って分かった
本当だね 約束だよ いつかね いつかおどるよ

僕らはみんな同じ弱虫
人間なんだ
太陽の下
手と手つないで
寄り添い合って
生きている

僕達の新しい先生は
若くて楽しい人気者
さわやかで
体育の時間は
僕らと一緒に汗をかく
けども僕にはわかるんだ

先生も本当は悩んでる
テレビのようにはいかないよ
たいへんな職についたね
つらいね

踊るよ踊るよ
僕らは踊るよ
踊るよ踊るよ
俺達は踊るだけ
それだけだよ

僕らはみんな同じ弱虫
人間なんだ
太陽の下
手と手つないで
寄り添い合って

生きている

僕達の自慢の先生は
まじめで話せる人気者
職員室のその後姿に
こないだ白髪をみつけたよ
先生の立場にしてみれば
PTAと学校の板バサミ
そんなに頭がいいのにね
たいへんな職についたね
つらいね

踊るよ踊るよ
輪になって踊るよ
踊るよ踊るよ
俺達は踊るだけ
いい気なもんさ

僕達の頼れる先生は
このごろ疲れているみたい
授業中さわがしくしていると
時々突然ムキになる
彼女がいないとひやかされ
もちろん恋するヒマがない
美人の生徒にゃ手がだせない
たいへんな職についたね
えらいね

踊るよ踊るよ
僕らは踊るよ
踊るよ踊るよ
俺達は踊るだけ

僕らはみんな同じ弱者
人間なんだ
太陽の下
手と手つないで
寄り添い合って
生きている

ぼくらはみんな同じ弱虫
人間なんだ
太陽の下
手と手つないで
寄り添い合って
生きている

学校や企業におけるヒエラルキー（階層社会）の中
でもがき苦しんでいる「弱虫」がいる。教師も生徒も同じ
苦しみの中にいる「弱虫」と規定している。体制側にい
ながら、国家の敷いたレールを着実に歩んだ成功者（ホ
ワイトカラー）としての捉え方ではなく、抑圧される者
として、自分らしさすら発揮できない様子を述べている。
「PTAと学校の板バサミ」は、「僕ら」からすれば、親
と学校の板バサミと換言できるだろう。

崩壊後の2004年、バブル期には表出することがなかつ
た、仕事に対する「やりがい」を求める作品が登場する。
社会は有無を言わせない競争の時代に入り、置かれた立
場で自己の最適化を図る必要が生じた。そこには、抵抗
や反抗ではなく、順応という命題があたえられることにな
った。Mr. Childrenの「彩り」もその1つである。

③ Mr. Children 「彩り」

ただ目の前に並べられた仕事を手際よくこなしてく
コーヒーを相棒にして
いいさ 誰が褒めるでもないけど
小さなプライドをこの胸に 勲章みたいに付けて

僕のした単純作業がこの世界で回り回って
まだ出会ったこともない人の笑い声を作ってゆく
そんな些細な生き甲斐が 日常に彩りを加える
モノクロの僕の毎日に 少ないけど 赤 黄色 緑
今 社会とか世界のどこかで起きる大きな出来事を
取り上げて議論して
少し自分が高尚な人種になれた気がして
夜が明けて また小さな庶民

憧れにはほど遠くって 手を伸ばしても届かなくて
カタログは付箋したまんま ゴミ箱へと捨てるのがオチ
そして些細な生き甲斐は 時には馬鹿馬鹿しく思える
あわてて僕は彩りを探す
にじんでいても 金 銀 紫

ただいま
おかえり

なんてことのない作業がこの世界を回り回って
何処の誰かも知らない人の笑い声を作ってゆく
そんな些細な生き甲斐が 日常に彩りを加える
モノクロの僕の毎日に 増やしていく 水色 オレンジ

なんてことのない作業が 回り回り回り回って

今 僕の目の前の人の笑い顔を作ってゆく
 そんな確かな生き甲斐は 日常に彩りを加える

モノクロの僕の毎日に 頬が染まる 温かなピンク
 増やしていく きれいな彩り

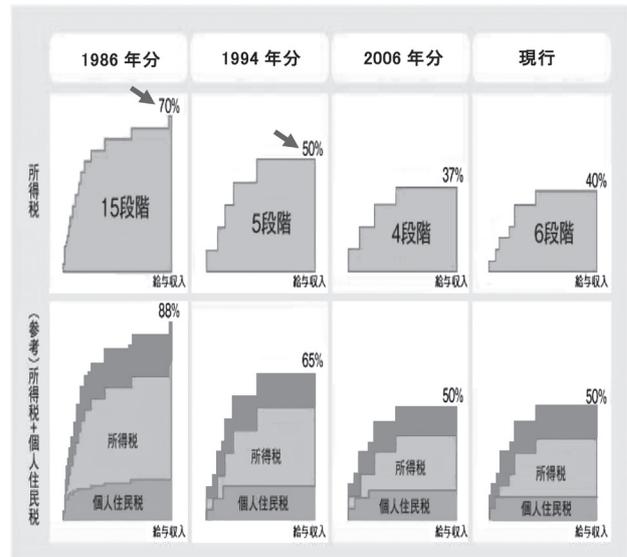
「大きな物語」の頃の標的（国家や企業など）が、この時代にはその姿がおぼろげになり、「小さな物語」⁽²⁾として自己完結している様が見て取れる。「なんてことのない作業」が「何処の誰かも知らない人の笑い声を作って」、それが「生き甲斐」になる。「作業」(=労働)が建て前や手段であり、便宜的に取り繕いながらやり過ごすものではなく、労働は個人のやりがいや生きがい投影されたもの、とする観点が崩壊以前とは大きく異なっている。

(2) 税制にみる「トランジット」の前後

タモリが「笑っていいとも」⁽³⁾を担当していた1986年頃、彼は本番中に「オレは、税金を払うために働いている」と声高に述べ、それを笑いのネタにしていた。松下幸之助⁽⁴⁾も当時の日本の税率に不満や疑念をもった人物の一人だった。彼は「我が国の所得税は極めて高い。私は10%くらいの手数料を国から貰っているようなものだ」と語っている（1986年『Voice』3月号）。課税対象額が大きくなるに従って税率が高い累進課税⁽⁵⁾は、高額所得者にとって受け入れ難い仕組みだったのだろうか。下記の図で見ると、崩壊前の所得税の最高税率は70%（1984～86）であり、それに住民税を加えると88%にもなる。これが崩壊以後、“減税”にシフトしていく。この数値は、今現在55%（図1では、現行所得税40%、住民税10%、合計50%となっているが、所得税45%+住民税10%=55%が正しい）であり、最高時に比べると33%下降している。ここでは、この現象について詳細な説明をすることはしない。ただ、所得の再分配⁽⁶⁾という機能が弱体化し、本来果たすべき社会的弱者救済という目的の遂行が、難しくなったのは事実であろう。格差社会が拡大したのは、これ以降のことである。

崩壊後の1992年、中野孝次は『清貧の思想』で日本人の生き方に対する警鐘を鳴らしている。「人間性をとりもどすために、われわれは生活をもう一度根本から考え直す必要があると思われる。社会全体についてはどうしようもないなら、せめてその中で受動的に流されればなした自分自身の生き方だけでも、自分で納得のいくものに立て直したい」と。崩壊後、日本人は「根本から考え直す」ことをし、あるべき方向に導くことがで

図1 所得税の税率構造（イメージ図）



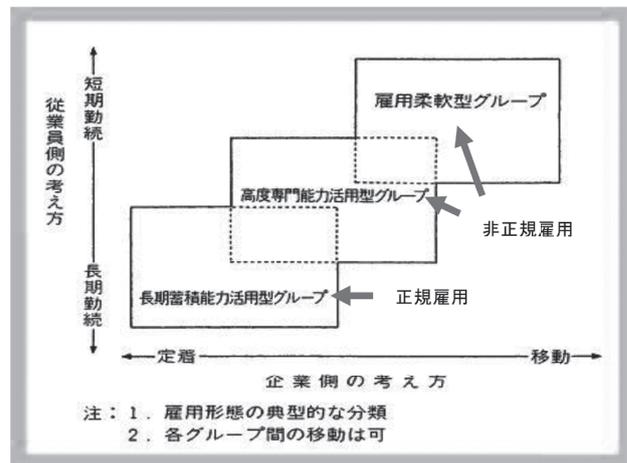
（財務省 HP より引用）

きた、と結論づけることは難しい。

(3) 新卒正規雇用にもみる「トランジット」の前後

1995年、日経連（日本経営者団体連盟）が報告書（『新時代の「日本的経営」－挑戦すべき方向とその具体策』）を公表した。その報告書を図式化したものが以下である。

図2 日経連報告による「雇用のポートフォリオ」

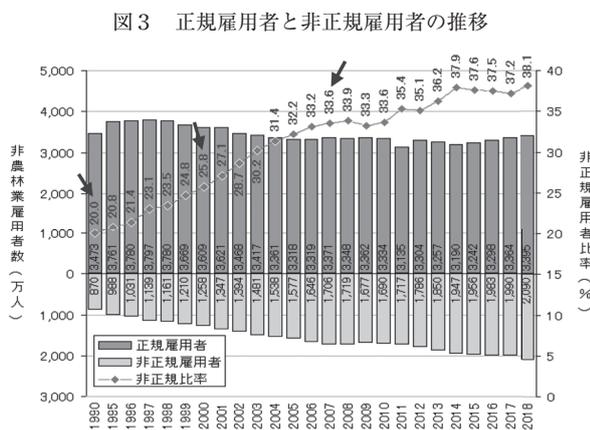


（連合総研レポート2014年7・8月号より引用）

この報告書では、従来の従業員全体を「雇用のポートフォリオ」⁽⁷⁾として再構成している。上記の3グループが「雇用の層別化」として提示されたものである。図中にあるように、①雇用柔軟型グループ、②高度専門能力活用型グループ、③長期蓄積能力活用型グループがそれぞれである。①と②については、正規雇用を前提としていな

い。③は正規雇用を前提としている。日経連（＝経営者側）が、それまでの日本的雇用慣行の見直しをはかり、正規雇用のスリム化を目指したものである。無論、その意図を十全に果たすために、労働基準法、労働者派遣法、職業安定法の改正など（三法とも2003年改正）の労働法制の「規制緩和」を徹底的にすすめてきた。その意味では、官民をあげて、労働者の流動化をすすめ、企業側の意図を汲んだ政策決定がなされてきたといえる。新卒者に対する企業側の正規採用というそれまでの「保護」姿勢は改められた。企業は雇用管理を低コスト構造に転換できたが、これにより新卒者は正規か非正規か、「競争」社会の只中に放りこまれることになった。かつて、新規学卒者は「赤ちゃん渡し」により就職することができた。学生時代の merits（功績）が問われることなく、メンバーの「一員」としての「資質」の有無が採用の成否に大きく関わっていた。能力や技術は入社後に様々な研修を通して学ぶものであり、企業側の要求はおしなべて高いものではなかった。その意味で、手垢のついていない新規学卒者は、鍛え上げるのには都合がよかった。

1990年の時点で、雇用者に占める非正規雇用者の比率は20.0%だった。当初、この報告書（『新時代の「日本的経営」』）により、「非正規」が大きく増えることはないだろうという見通しもあった。しかし、10年後の2000年に25.8%、その10年後の2010年に33.6%と上昇の一途をたどっている。企業側の狙いは確実に実を結んでいる。



(注) 非農林業雇用者(役員を除く)が対象。1～3月平均(2001年以前は2月)。男計と女計を合計した結果。非正規雇用者にはパート・アルバイトの他、派遣社員、契約社員、嘱託などが含まれる。2011年は若手・宮城・福島を除く。

(財務省 HP より引用)

これまでに述べた雇用形態の変化は、「新卒正規雇用」にも大きな影響を及ぼしているのだろうか。

2006年版国民生活白書に「大学卒業直後の就業形態割合」が掲載されている。ここには、1992年の正社員の割合が88.6%、2002年の正社員が66.7%となっている。

翻って、非正規社員の割合は、11.4%から33.3%に増加したことになる。1991年の崩壊を経て、1995年に公表された「雇用のポートフォリオ」以降、否応なく新規学卒者も「非正規」の洗礼を受けることとなった。

また、「転職前後の雇用形態比較」(総務省の「労働力調査」2004年)によると、正社員から正社員への転職は62.5%、非正規雇用(パート、アルバイト等)から正社員への転職が22.6%という数値を掲出している。この数値から、卒業時の就職が正規雇用ではない場合、その後も不安定な仕事に就く可能性が高いことになる。「非正規」で採用される比率が高まり、その後も非正規のままの雇用を継続するという、「負の連鎖」に陥ることが決して稀なことではない証左といえる。崩壊以前、新規学卒者は「正規」雇用を前提としていたが、その慣行は大きな変容をみせている。

崩壊以降、「勝ち組・負け組」という言葉が使われるようになった。それは、企業が順調に業績を伸ばし事業を拡大している場合「勝ち組」となり、業績の悪化により倒産の危機に見舞われる企業は「負け組」と呼ばれた。同様に、個人の生活実態にもこの「勝ち組・負け組」の意識が浸透しはじめており、これを山田は「二極化する日本社会」⁽⁸⁾と規定している。

2. 「3K」と若者の意識

前章では、JPOP(＝感性)、税制(＝金銭)、就職(＝雇用)を挙げ、崩壊の前後で、どのような変容が生じたのか概観した。この感性・金銭・雇用という「3K」を現象と捉えた時、同時期の若者たちの意識にどのような変化があったのだろうか。1953(昭和28)年以来5年ごとに統計数理研究所によって実施されている「日本人の国民性調査」のデータにより考察してみたい。以下がその調査結果である。

(1) 努力が報われない社会

2013年に実施された調査に「いくら努力しても、全く報われないことが多いと思うか」(図4)という問いがある。その結果が上記のグラフである。

「努力しても報われない」という人が、全体では1988年の17%から2013年には26%へと10%近く増加している。どの年代層においても増加しているが、特に20代・30代の男性では、1988年に4人に1人だった割合が、2013年には3人に1人を超えている。

この調査では、「生活水準10年の変化」と「努力すれば報われるか」をクロス集計(図5)し、生活水準が10年間でわるくなったとする人ほど、「努力しても報われ

図4 いくら努力しても、全く報われないことが多いと思う

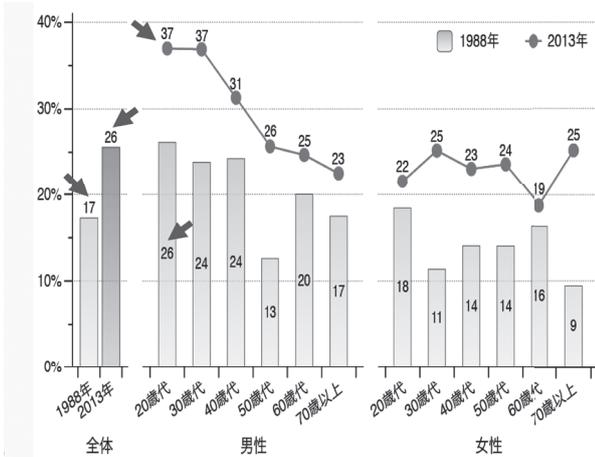


図5 生活水準 10 年の変化と努力は報われるか

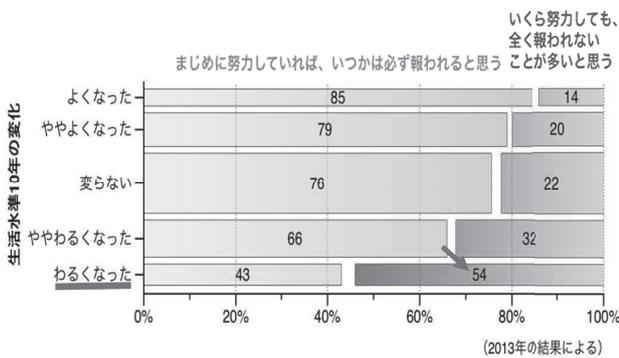
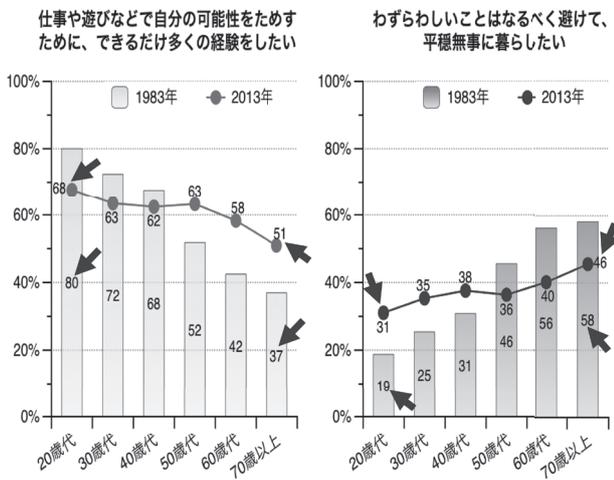


図6 可能性をためすか



ない」と回答する割合が高い、としている。この傾向は、どの性・年齢層でも同様である。

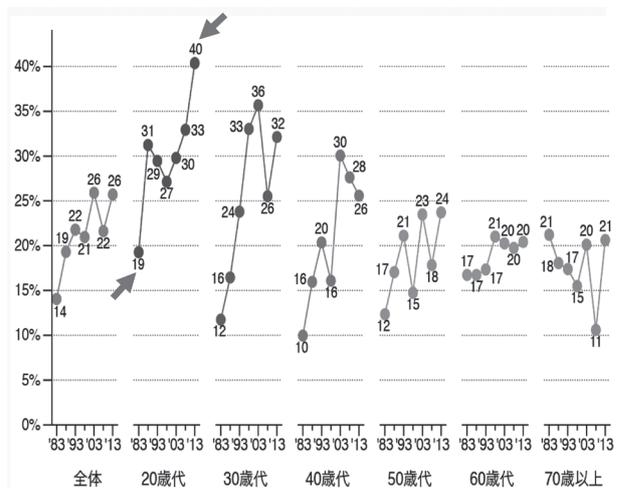
(2) 煩わしさを避ける若者

図4と図5から、崩壊をはさんで、努力をしても報われないと考える若者が増え、特に、「生活水準」の悪化がそれに拍車をかけるという傾向が読み取れる。このような社会背景を前に、若者は「自分の可能性」のために「多くの経験」を積むことに消極的なようだ。1983年には、20代の80%が「多くの経験」をしたいと考えたのに対して、70代以上の58%は「平穩無事」を望んでおり、世代間において、よりアニマルスピリット⁽⁹⁾を有しているのは若い世代であり、世代間の考え方には顕著な差異が認められた。しかし、2013年には、その差異が縮まってきた。「自分の可能性」について、20代と70代の1983年と2013年を比較した場合、両世代の差は43(80→37)ポイントから17(68→51)ポイントに縮まった。同様に「平穩無事」は、39(19→58)ポイントから15(31→46)ポイントに縮まった。前項の「報われない」ことやストレスを抱えた若者にとって、能動的にその生を全うすることよりも、煩わしさのない安穩とした生活を願う意識に傾倒している様子が窺える。

教育界では、アクティブラーニング⁽¹⁰⁾を祖上へのせ、様々な議論が展開されている。それは、初等教育から高等教育機関まで同様である。その成否が大学教育にとっても大きな命脈を握っているといっても過言ではない。教員と学生、学生相互の対話型の授業が求められており、それが社会の潮流ではあるが、大学に集う学生の意識との乖離も、また一つの事実であろう。

(3) 「仕事観」の変容

図7 お金があれば、仕事がなくとも、人生がつまらないとは思わない



日本人にとって仕事の果たす役割大きい。玄田⁽¹¹⁾はその著書でこのように述べている。「日本人に『あなたの希望は何ですか』とたずねると『もっとよい仕事をしたい』とか『自分らしく働きたい』など、仕事にまつわる希望を語る人が多い。希望が持てない人の特徴を調べると、仕事に恵まれない場合や、それに伴い収入の乏しい場合も目立つ。希望が社会に広がるための一番の手段は、まぎれもなく雇用対策の充実である」。今日、働くことが手段としてよりも目的として、そこに生きがいややりがいを求める捉え方がある。自己実現⁽¹²⁾とは、仕事に生きがいを見い出してこそ初めて為し得るとする意見もある。日本人の勤労観とも通底する部分であろう。このような旧来の考え方とは一線を画すデータが図7である。

図7では、仕事とお金に関する質問をしている。「いくらお金があっても、仕事が無ければ人生はつまらない」とする問いと、「仕事が無くても、人生はつまらないと思わない」とした問いである。「お金があれば仕事が無くてもよい」とする回答(2013年)は全体で30%に満たないが、崩壊前から、多少増減しているが増加する傾向にある。特に若者の増加が際立っている。特に20歳代は1983年の19%から2013年には40%に達している。日本人の、特に、若者の勤労観に変容の兆しがみえる。

では、幼少期から受け取ることができる、まとまったお金(お年玉)の額はどうか。金融広報中央委員会⁽¹³⁾の2015年度第3回「子どものくらしとお金に関する調査」によると、子どもがもらうお年玉は崩壊前から上昇の一途をたどっている。近年ではもらった相手は祖父母が最も多く、次いで親戚、親となっている。その総額は、小学生では、低学年は「10,000円くらい」が最も多く(2割強)、中学年・高学年は「10,000～19,999円」が最も多く(約3割～3割弱)となっている。なお、これらの額を上回る額をもらっているとの回答も多い。中学生・高校生では、「10,000～50,000円未満」が最も多く、6割強となっている。

子どもに対してお小遣いを渡す場合、ある労働への対価、即ち「お駄賃」という意味合いを有する場合がある。無論、報酬(対価)を得るためには相応の労働が必要であることを認識している子どもが大多数ではあろうが、一方で「労働なき対価」を得ることにより、すぐに偉ぶった消費者に豹変し、モノヤコトの値踏み始める小学生や中学生がいることも一面であろう。ゲームソフトや日頃受けている授業等、値踏みの対象は周囲にいくらでもある。物差しに合わなければ、それを拒絶できる自由があることを、若者たちは幼少期から徐々に体得してきた。また、自身がたいへん辛い労働をした場合、その労働に

見合う対価か否か、という鋭敏な意識も生まれるだろう。このように考えると、「労働なき対価」が今後も増大することにより、「お金があれば仕事が無くてもよい」という価値観を抱く若者も同様に増大することは想像に難くない。

(4) 職場の人間関係は回帰的

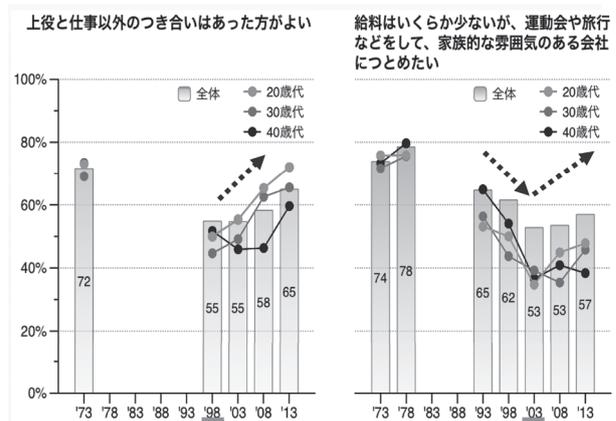


図8 職場の人間関係観

職場の人間関係について問うている。図8左図は、上司と仕事以外の付き合いが「なくてもよい」か「あった方がよい」か、というものだ。「あった方がよい」という割合は崩壊後の1990年代後半から増加傾向にある。特に20歳代や30歳代では、2013年には、1973年と同じ70%前後にまで戻している。

また、図8右図は「給料は多いが、レクリエーションのための運動会や旅行などはしない会社」と、「給料はいくらか少ないが、運動会や旅行などをして、家族的な雰囲気のある会社」のどちらで働きたいか、と問うている。「家族的な雰囲気のある会社」は、1978年から2003年にかけて減少していたが、近年は再び上昇に転じ始めている。

ここに掲出した2つのデータは、いずれも2003年が「起点」となっている。「つきあい」を望む心理的作用の兆しがこの年から始まっている。この時期は、いわゆる「小泉改革」(2001～2006)の最中である。「だれが、まずくて高いラーメンをたべますか」、「格差が広がっても悪いことではない」(いずれも、2006年3月予算委員会)などの小泉発言を、国民の脳裏に焼き付け、彼は新自由主義に連なる政策を遂行した。日本社会はこぞって「椅子取りゲーム」を始めることになった。競争が至上命題化された。「競争」と「個人化」がこの頃の空気を象徴する文句であった。このような時代の空気とは裏腹に、若者には他者との接点を求める、その萌芽があったと看取できる。

3. あとがき

やなせたかしはその著書の中で、「漫画家的精神」について、「好奇心が強く、知的でユーモラス、物事を面白がる」と述べている。確かに、彼の漫画は、その精神が如実に反映されたが故に、多くの人が愛して止まないのであろう。

一方、村上龍は「趣味を歓迎する社会の弊害」というテーマで、「趣味の世界は基本的に閉鎖的なので、お互いに重要な情報をやりとりできて、お互いに刺激を与え合うという人的ネットワークを作るのが難しい。テンションの高い訓練や勉強を続ける中で、息抜きは必要だろうが、それは洗練された趣味とは別のものである」と述べている。

現代は、一見、楽しいコトや楽しいモノが周囲に散乱しているが、真に必要なコトやモノ、自分らしい生き方に出会うのは、容易ではない。自身が就くべき任務(ワーク)や趣味(ライフ)、何のために生きるのか。今こそ、大学は、形而上的なそれらの側面を学生とともに思索し、正解のない時代に個別の解を追求するバ(場)にならなければならない、と考えるのである。

註

- (1) 大きな物語 リオタール(フランスの哲学者/1924~98)は、一つの価値観によって世界を総合的あるいは統一的に把握し、再構成しようとするを「大きな物語」と表現した。日本の高度経済成長下の消費社会も「大きな物語」として扱うことは可能だろう。国家により価値観が提示され、それを国民が承認した時代といえる。
- (2) 小さな物語 「大きな物語」の対概念が「小さな物語」であり、「大きな物語」から排除された個々人の物語のもつ価値観にもその意味を認めるとする視点である。
- (3) 笑っていいとも フジテレビ系列で1982~2014年まで、平日の12:00~13:00に生放送されていた帯バラエティ番組で、森田一義(タモリ)の冠番組だった。
- (4) 松下幸之助 日本の実業家・発明家・著述家/1894~1989。パナソニックを一代で築いた経営者である。「経営の神様」ともよばれる。
- (5) 累進課税 課税対象の額が大きくなるほど、税率が高くなる仕組み。日本では所得税や相続税などでこの方式がとられている。所得に応じた税負担や、富の集中を排除することなどを目的としている。
- (6) 所得の再分配 税制や社会保障制度を通じ、高所得者から低所得者へ富を分配すること。貧富の格差や階層の固定化などの社会的弊害を避けるねらいがある。
- (7) 「雇用のポートフォリオ」「ポートフォリオ」は、本来「携帯用の書類入れ」を意味する。その後、有価証券の保管などにこれが使われるようになり、個人や企業が保有する有価証券の組み合わせを一括りに表現する言葉になった。「雇用のポートフォリオ」は、企業の人的資源がどのような人材で構成されているのかを表現する言葉として使われている。

- (8) 「二極化する日本社会」『希望格差社会』(山田昌弘著)には、「戦後は経済格差が縮小していったが、1990年頃を境に、格差が拡大の方向に反転したという議論…階層が固定化される傾向が見られる。」とある。
- (9) アニマルスピリット 英国の経済学者ケインズ(1883~1946)が用いた。将来の収益に期待して事業拡大をしようとする心理を指し、「野心的意欲」と訳す場合もある。
- (10) アクティブラーニング 具体的には教師による一方的な指導ではなく、生徒による体験学習や教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークを中心とするような授業のことを指す。
- (11) 玄田有史は『希望学』で、希望をこのように述べている。「希望(Hope)を〈A Wish for Something to Come True by Action〉であると考えた。希望は、〈気持ち-wish〉〈何か-something〉〈実現-come true〉〈行動-action〉という4本の柱から成り立つ」。
- (12) 自己実現 マズローによる欲求段階説の高位の欲求。自己の能力や可能性を十分活かして現実化していくことを自己実現とした。人間の疎外や非人格化が問題とされる今日、個人にとっての切実な欲求の一つとなっている。
- (13) 都道府県金融広報委員会は、政府、日本銀行、地方公共団体、民間団体等と協力し、暮らしに身近な金融に関する広報活動を行っている。

参考文献

- 阿部真大『居場所の社会学』(2013)
東 浩紀『動物化するポストモダン』(2009)
熊代 亨『融解するオタク・サブカル・ヤンキー』(2013)
玄田有史『希望の作り方』(2011)
玄田有史『希望学』(2013)
高垣忠一郎『生きることと自己肯定感』(2010)
中野孝次『清貧の思想』(1992)
村上 龍『13歳のハローワーク』(2007)
やなせたかし『絶望の隣は希望です』(2012)
山田昌弘『希望格差社会』(2012)
内閣府『国民生活白書』(2006年版)
統計数理研究所『日本人の国民性調査』
総務省統計局『労働力調査』
連合総研レポート2014年7・8月号